

アトリエ
探訪

デザインの生まれる場所
バッグデザイナー
江面旨美さん

「人と違う」を追い求め 30年以上、革と向き合う日々

バッグを作り続けて34年になるという、江面旨美さん。これまで「人と違うもの」を作ろうと模索してきましたが、今は「私はこれでいい」と言える境地に立てたそうです。創作の源となるアトリエはどのようなところなのか、東京都日野市のご自宅に伺いました。

えづら・よしみ 東京都生れ。青山学院女子短期大学、東京YMCAデザイン研究所、武蔵野美術短期大学で学び、バッグ作りの道へ。1985年に自作のバッグを個展で発表。バッグ作りについての著書はこれまでに7冊を刊行し、現在も個展を中心に活躍中。<http://umamibags.net>

撮影：福田典史(本誌)／取材、文：大橋智子



道具、工具類は、布製ウォールポケットに収納してあります。これは、江面さんが自分で製作したもの。

自宅にあるアトリエには、様々な革やパーツ、道具類が美しく整理され、収納されています。ここから作り出される革のバッグは、大胆で力強さのみならずシンプルなデザイン。使い勝手がよく、どこに行くにも一緒に連れていきたいくなるシックなおしゃれ感があります。

バッグ作りを始めてから三四年になるという江面旨美さんですが、この道に進むまでには紆余曲折がありました。

「高校を卒業して短大、デザイン系の専門学校で学び、デザイン事務所に就職しました。結婚後に通信制の大学で油絵を学ぶのですが、そのタイミングで革と出会いました。雑誌に掲載されていた吉田カバンに連絡をして自分の作品を持っていったところ、職人を養成する学校に入れるよう取り計らってくださったのです。油絵の勉強も続けていたのですが、バッグ一本でやりたいと決意しました」

自作のバッグで個展を開いたのが、既に三〇代になってから。その時考えたのは、「人のやっていないことをやってみよう」

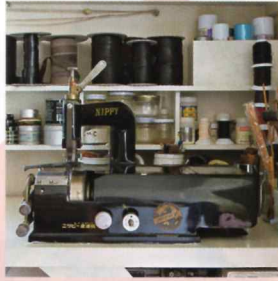
〈アトリエには革製品作りならではの
珍しいミシンや機械が〉



薄手の革や布地を縫うために使う、足踏み式の工業用ミシン。



左のミシンよりもパワフルで、厚みのある革にも適した、バッグのまちのように立体的な部分にも使いやすいミシンです。



革をすくための機械。分厚い革はこの機械で薄く削ぐようにすき、扱いやすい厚さに整えてからバッグに使っていきます。



アトリエの天井には、バッグに使う様々な種類の革を収納。主に革、帆布を使うことが多いそうです。



江面さん製作のバッグ。右上はクロコ。右下は牛革のトートバッグ。持手は小さく、容量は大きいのが特徴。左は20年前に作成したもので、今では娘さんが愛用しています。



バッグの型紙は、ひもでまとめてつるしています。いくつものパーツに分かれ、革の模様確認のために窓枠をあけたものも。



写真集やデザイン集など、インスピレーションを与えてくれる本。背表紙の色別に、棚に収めてあります。

BOOKS

著書が文化出版局から発売中!



『プロが教えるテクニック
バッグLESSON』
1,400円



『革のバッグLesson 1,2』
1,700円

ということ。当時、女性向けのバッグは花柄などの装飾性のあるものが多かったのですが、江面さんはあえてシンプルでデザインのバッグを製作しました。

次に考えたのは、和の要素を取り込むこと。この時、イタリアのセレクトショップの女性に「オリジナリティとクオリティがあれば、和の要素があるかないかは関係ない」と言われて、深く共感した江面さん。ことさらに寄せる必要はなく、自分ならではのオリジナリティを發揮すればいいのだと気づきました。

「以前は、とにかく高級感があるものを、と思っていましたが、今は潑刺、元気、生き生き、がキーワード。「元気でしょ」と周りに宣言しているようなデザインになっってきました」と、江面さん。

そんなバッグを持っているだけで、自分で元気になる。だから私はこれでいい。今だからこそ、こう言い切れるようになったと笑顔で語ってくれました。